The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ライプニッツにおける共可能性と不共可能性
Author(s)	阿部, 倫子
Citation	メタフュシカ. 2018, 49, p. 113-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ライプニッツにおける共可能性と不共可能性

阿部倫子

現実に起こったことと別様の可能性は、どうして実現しなかったのか。純粋に可能的なままにとどまる事物は、現実世界の事物と比べて何が欠けているのか。17 世紀の哲学者ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）における「共可能性」という概念は、こうした問いに答えのひとつを与えうる。共可能性とは事物のたんなる存在可能性ではなく、複数の事物が共に存在する可能性を指す[1]。この概念に依拠すると、最初の問いにはこう答えられる。現実とは別様の可能性が実現しなかったのは、それが現実世界の出来事と共可能的でないからである。純粋に可能的なだけにとどまる事物は、現実世界の事物との共可能性を欠く。

本稿はライプニッツ哲学における共可能性の位置づけを論述するとともに、20 世紀の哲学者ドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）のライプニッツ論を参照し、共可能性という概念がもつ射程を検討する。複数の事物が共に存在する可能性という定義をみれば、共可能性は論理主義的発想だけから採用された概念に見えるかもしれない。だがライプニッツの形而上学は彼の自然神学と分かちがたく、共可能性についても例外ではない。一方ドゥルーズのライプニッツ論はこの文脈をふまえつつ、神にかかわる前提が違っていたら可能世界論はどう変わりうるのかという仮定を簡潔にだが行う。したがってドゥルーズを援用すれば、ライプニッツにおける共可能性の背景を理解するのに役立つだろう。自然神学上のライプニッツの立場が彼の可能世界論をどう条件づけるかが明らかになるだろうからだ。共可能性という概念の射程は、ライプニッツにおける神のありようからどう影響を受けるのか。本稿は、この視点で共可能性を論じる。

ライプニッツの共可能性については多くの先行研究があり、後で見るように有力な解釈がいくつもある。本稿の目的はさらに新規の解釈を提案することではなく、ドゥルーズを参照する有用さを示すことにある。彼は共可能性が成立しない事態について、すなわち「不共可能性」について論じた。不共可能性をどう取るかに共可能性の解釈の特徴が表れるという指摘はすでにある[2]。

---

1 「共可能的である（compossible）」という術語は中世の論理学に由来し、ライプニッツより前の時代ではドゥンス・スコトゥス（c.1265-1308）が採用した。Buzon, « COMPOSSIBLE ».

2 Messina and Rutherford, p.962.

よって不共可能性に注目するという点では、ドゥルーズを参照する特別な必要はない。本稿が示したいのは、ドゥルーズがライプニッツ解釈を超えて行った仮定が、かえってライプニッツにおける共可能性の理解に役立つことである。

本稿は次の構成の通りに進める。1 ではライプニッツ哲学における共可能性の位置づけを論述する。まず 1.1 で共可能性についての基本的な事項を確認する。1.2 で共可能性という概念がなぜライプニッツにとって重要なのかを述べる。同時代のスピノザとの違いがかかわる。1.3 では 1.2 をふまえ、ライプニッツが擁護しようとした神の自由を共可能性がどう支えるのかを示す。2 では共可能性についての諸解釈のうち、主な 3 種類を概観する。これは 3 でドゥルーズを参照するとき、彼のライプニッツ論が専門家の解釈からかけ離れたものではないと示すためである。3.1 ではドゥルーズ本人の記述を確認し、また橋本の先行研究にふれる。3.2 では 3.1 に基づいて、ライプニッツにおける神のありようが共可能性の射程をどう定めるのかを論じる。ドゥルーズへの参照が有用だと示すことが、本稿の目的である。

1　共可能性とその役割

1.1　諸事物間の共可能性について

ライプニッツは、この世界はありうる限りで最善の世界だと主張する。神の知性においては無数の可能世界があって、神はその中から最善の可能世界を選び現実化する。共可能性について確認する前に、この最善世界創造説についてふれておく。後で述べるように、神の創造行為の自由を支えるという役割が共可能性にはあるからだ。主として『弁神論』（1710 年）を参照する。この著書は神の善性を擁護するために書かれ、世界の創造にかかわる内容が多い。

最善世界の創造は 3 つの区分で説明される。神の「知性（entendement）」が無数の可能世界についての観念をもち、「意志（volonté）」がその中から最善の可能世界を選び、「力能（puissance）」がそれを現実化する[3]。注意しなければならないのは、ライプニッツでは神の知性は神の意志に依存しないことである[4]。「その知性はもろもろの本質の源泉（la source des essences）であり、その意志はもろもろの現実存在の根源（l'origine des existences）である」[5]。たとえばライプニッツは永遠真理創造説をとらず、永遠真理は神の知性の対象であって神の意志からは独立だとする[6]。2 ＋ 3 が 5 になるのはことがらそれ自体の本質によるのであり、神の意志がそう望んだからではない。偶然的な出来事でできた無数の可能世界についてもこの点は同じであって、それら可能世界の存在は神の意志ではなく知性に由来する。神が意志を以て選択し力能を以て現実化するのは最善世界ひとつだけであって、すべての可能世界ではない。

創造された現実の世界は、以下のように記述される。

私が世界（monde）と呼んでいるものは、現実存在する（existant）事物の全体的継起（suite）、

3　『弁神論』7 節。（GP, VI, p.107.）以下、断りのない限り日本語訳は工作舎著作集から引用。
4　『弁神論』335 節。（GP, VI, pp.313-314.）
5　『弁神論』7 節。（GP, VI, p.107.）
6　『弁神論』20 節。（GP, VI, p.62.）

> 全体的集まり（collection）のことであるが、これは、幾つかの世界がさまざまの異なった時間や異なった場所に現実存在しうるなどとは主張しないようにするためである。というのも、もしそのようなことになれば、複数の世界のすべてを一緒にして一つの世界として、あるいはお望みなら一つの宇宙（univers）と見なさなければならなくなるからである。たとえすべての時間と場所が充足されているとしても、それは無数の仕方で充足させることができたはずだし、現に無数の可能世界があるということは依然として常に真である。[7]

この記述から明らかなのは、時間や場所が離れているだけでは別の世界とは呼べないことである。最善の可能世界が神によって創造されても、残りの可能世界は現実存在することなく神の知性の中の純粋な可能性にとどまる。それらが創造された世界と時間や空間を共有することはない。この点についてファッチは、ライプニッツの意図が世界の「多重性（multiplicity）」ではなく世界の「多数性（plurality）」にあるとまとめている[8]。

以上のような最善世界創造説のもとでライプニッツは共可能性をあつかう。『弁神論』201 節では《compatible》という形容詞で、共可能性に似た考え方が登場する。神の世界創造は必然的でないというライプニッツの主張は、可能的なもののすべてが創造されたわけではないという事態に言い換えられる。

> もし神が事物を産出することが形而上学的必然性によって強いられているとしたら、神は可能的なもののすべてを産出するか、もしくは何も産出しないかのどちらかになるということは私も認める。［……］しかし可能的なもののすべてが宇宙の同一の継起の中で互いに共存できる（compatible）とは限らないのだから、まさにこのために、可能なもののすべてが産出され得るわけではないことになる。それゆえ神は、形而上学的に言って、この世界の創造を強いられてはいない、としなければならない。[9]

「宇宙の同一の継起」は世界のことを指す。可能的なもののすべてが共存可能とは限らないために、可能的なもののすべてが唯一の世界へとまとまって産出されることはない。共存しえないものは別々の世界に属することになる。

この引用は、神は道徳的にふるまうために最善の世界を創造するだろうが、それは形而上学的必然性に強いられてのことではないという文脈のもとにある。「創造」は能動的な行為であるから、「創造を強いられ」るという言い方は一見奇異に思えるかもしれない。「形而上学的必然性によって強いられている」という表現でライプニッツが言っているのは、他の選択肢がなくそうせざるをえないということである。全可能世界を創造せざるをえないような「可能的なもののすべてを産出する」という状況や、どの可能世界も創造できない「何も産出しない」という状況は、一部

---

7 『弁神論』8 節。（GP, VI, p.107.）

8 Futch, pp.13-18.

9 GP, VI, p.236.

の可能世界だけを創造する可能性が認められていないという点で形而上学的に必然的である。こうした仮定を指してライプニッツは神が「創造を強いられ」ると言う。複数の選択肢が可能なことがライプニッツにおける自由に重要なことは、1.3 でみる。

『弁神論』と同時期のブルゲ宛書簡（1714 年）は《compossible》の語を使って同様の説明をする[10]。

> あなた［ブルゲ］はこうも付け加えました、「宇宙をひとつの集まり（collection）とみなすなら、複数の宇宙がありうると言うことはできない」と。宇宙が可能的なもの全体の集まりであるならば、このことは真でしょう。しかし可能的なもの全体が共可能的（compossible）というわけではないので、このことは真ではありません。宇宙は一定の仕方での共可能的なものの集まりでしかないのです。そして現実の宇宙は現実存在する可能的なもの全体の集まり、つまり最も豊かに組み上げられた集まりです。可能的なものには様々な組み合わせがあるので、ある組み合わせは他の組み合わせよりも善く、各々が共可能的なものの組み合わせであるような複数の可能的な宇宙があるのです。[11]

共可能性は、複数の事物が共に存在しうる可能性を指す。可能的であることと共可能的であることは明確に区別される。ある事物が可能的であることは、現実世界を構成する事物とそれとが共可能的であることを保証しない。別の言い方をすると、世界は可能的なものの集まりではあるが、可能的なものすべての集まりではない。互いに共可能的なものどうしの組み合わせのうち最も豊かな組み合わせが最善可能世界であり、神の知性の中にあるそれを神の力能が実現して現実世界となる。

『弁神論』の《compatible》とブルゲ宛書簡の《compossible》を単純な同一視はできない。ブゾンの執筆による『世界哲学百科事典』の《compatible》と《compossible》の項は、両者の違いを以下のように述べる[12]。ふたつの出来事はそれらが共存可能であることなしに共可能的でありうる、言い換えれば、同一の時間と場所において産出されることなしに共可能的でありうる。共可能的であることの概念は、共存可能であることの概念よりも普遍性の度が高い。ライプニッツ自身はこう定義する。「共存可能性（compatibilitas）は諸事物に属し、共可能性（compossibilitas）は諸命題に属する」[13]。

ブゾンの指摘に従えば、共存可能性は同一世界内の事物どうしの関係を指し、共可能性はどの世界に属するかを度外視しての命題間の関係を指す。すでに引用した『弁神論』8 節によれば時間と空間を共有するものが同一の世界に属するのだった。そのためふたつの出来事が〈同一の時間と場所において産出されることなしに共可能的でありうる〉というのは、同一の世界に属する

---

10 共可能性は他にたとえば、『二十四の命題』（1690 年）の 7 節（GP, VII, p.289）や『事物の根本的起源について』（1697 年）（GP, VII, p.304）、『人間知性新論』（1703 年）の第 3 部第 6 章 12 節などでも言及される。

11 GP, III, p.573. 拙訳。

12 Buzon, « COMPATIBLE » et « COMPOSSIBLE ».

13 A. Ausg., t. VI, 2, p.493. 拙訳。ただしブゾンによる仏訳を参考にした。

ことなしに共可能的でありうるという意味である。共可能的であるためには共存可能であることが必ずしも必要でないので、共可能性は共存可能性よりも普遍的な概念である。

しかしこのような理解には、ブルゲ宛書簡での《compossible》の使われ方と一致しないところがある。ブルゲ宛書簡では、互いに共可能的でないものは別々の世界に属するのであった。同一の世界に属することなしに共可能的であるという理解は、これと矛盾する。またブルゲ宛書簡は出来事ではなく、「可能的なもの（les possibles）」・「共可能的なもの（compossibles）」・「現実存在する可能的なもの（les possibles existant）」と事物に相当する語彙での説明を行っている。したがってブゾンの指摘に従うならブルゲ宛書簡の《compossible》は、むしろ《compatible》の意味合いに近いことになってしまう。

このようにライプニッツでは、術語の使い分けが必ずしも一貫しない。本稿としては、共存可能性よりもより普遍的である共可能性の語を使って論述を続ける。後で概観する共可能性についての諸解釈でも、同一の世界に属する諸事物間の関係を指して共可能性の語を使っており、ライプニッツ解釈上同じ世界の事物についてこの語が使えないわけではない。

１．２　共可能性がなぜ重要か

ここでは共可能性がなぜライプニッツ哲学において重要な概念なのかを述べる。というのも諸可能世界の存在と関連の強い概念であることから、これに注目することはライプニッツ哲学をアナクロニスティックに論じることではないかとの指摘が想定されうるからである。ライプニッツの可能世界は、現代の可能世界意味論での可能世界とは大きく意味合いが違う。彼の目的は現実世界の最善性を論証することにあって、様相論の意味づけにはない[14]。そのため共可能性を可能世界意味論の一環であるかのように扱うのなら、たしかにライプニッツ研究からの逸脱である。

だが必然主義の回避という観点にたつなら、共可能性を論じる意義がある。ライプニッツは同時代のスピノザ（Baruch de Spinoza, 1632-1677）による必然主義を批判し、現実世界の偶然性を主張した[15]。スピノザの理論では、現実と別様の可能性というものは一切認められない。「物は現に産出されているのと異なったいかなる他の仕方、いかなる他の秩序でも神から産出されることができなかった」のである[16]。人間がある個物を「偶然的（contingens）」とか「可能的（possibilis）」と呼ぶことは、当人の無知ゆえにすぎない[17]。「偶然的」な出来事が起こったように見えても、実際にはそれは必然的な仕方で必然的に起きたのである。現実にこうある以外の世界は可能的にすら存在せず、そのためこの世界が現に在る通りに在ることは必然的である。

こうした文脈を意識して共可能性を解釈することは、共可能性を可能世界意味論の一環として

---

[14] 松田、101 頁。

[15] たとえば『弁神論』では序文（préface）32-3 節、本論 67 節、173 節、371-2 節などでスピノザが名指しで批判される。

[16] スピノザ『エチカ』第一部定理 33。日本語訳は岩波文庫畠中訳から引用。

[17] cf.『エチカ』第一部定理 33 備考 1、第四部定義 3・4。

扱うこととは違う[18]。たしかに偶然的・必然的といった様相がかかわる文脈ではあるが、それら様相をすべての可能世界で真かどうかで意味づけているわけではない。ライプニッツは偶然的真理を「事実の真理（vérité de fait）」、必然的真理を「思考の真理（vérité de raisonnement）」とも呼んで次のように定義する。

> 真理にも二種類ある。思考の真理と事実の真理である。思考の真理は絶対的でその反対は不可能であり、事実の真理は偶然的でその反対も可能である。真理が必然的である場合には、その理由を分析によって見つけることができる。[19]

必然的真理の理由を分析によって見つけるということは、その真理を原始的な観念や真理へと分解できるということである。たとえば数学の定理を分析すれば最終的には公理へ還元できる。これに対して偶然的真理では、理由の分析は無限に進む[20]。たとえばカエサルがルビコン川を渡ったという事実を細かい理由に分析していけば、無限に続いて終わりがない。

様相の意味づけのためではなく必然主義を回避するために、ライプニッツは可能世界と共可能性について語った。では、可能世界と共可能性がどのようにして必然主義の批判につながるのか。次節ではこれを示す。

１．３　世界の複数性と神の選択

共可能性という概念のおかげで複数の世界が可能となり、複数の可能世界があることで神による世界創造は偶然的な行為になる。可能世界と共可能性が必然主義の回避につながるのは、こうした仕方によってである。以下ではこれを具体的に示す。ライプニッツ哲学における共可能性の位置づけが明らかになるだろう。

まず、共可能性が世界の複数性を可能にするとはどういうことか。この点についてはメッシーナによる説明がすでにある。

> どの可能的な事物も他のすべての可能的な事物に対して共可能的もしくは不共可能的であることはないと想定することで、可能世界の複数性が導出される。（仮に、2 つの可能的事物が共可能的であるためにはそれらが個別に可能的であるだけで十分だとすれば、あらゆる可能的なもので構成されたひとつの可能世界があるのだと導出されてしまう－これはスピノザなら支持し、ライプニッツなら不支持を明白に望むようなことがらである。）[21]

共可能性という概念が、可能的なもののすべてが互いに共可能的であるような事態を不可能にす

18　スピノザ批判という文脈での共可能性の重要さはすでに指摘がある。Bouveresse, p.64. Messina and Rutherford, p.962.

19　『モナドロジー』（1714 年）33 節。（GP, VI, p.612.）

20　『モナドロジー』36 節。（GP, VI, pp.612-613.）

21　Messina, p.230.

る。仮にこの概念を認めないとすれば、可能世界を想定するのに諸事物間の関係を考慮する必要はないことになる。すると、どの可能的な事物も他のあらゆる可能的な事物と共に世界として集まりを成せることになり、世界はすべての可能的な事物でできた 1 通りしかありえなくなってしまう。これは世界は決して別様でありえないということであり、ライプニッツが批判する必然主義である。

それでは、可能世界が複数あることがどうして神の自由および現実世界の偶然性を支えるのか。ここではライプニッツにおける自由の定義が重要である。彼の自由は 3 つの要件で構成される。すなわち、「熟考（deliberation）の対象に対する判明な認識を含む叡智（intelligence）」・「われわれが自らを決定する自発性（spontanéité）」・「偶然性（contingence）、つまり論理的で形而上学的な必然性の除外」である[22]。この条件は人間の場合でも神の場合でも同じである。自発性・叡智による熟考について、人間の場合はこう述べられる。「断崖に追い込まれたり奈落の底へと突き落とされたりするような時でもない限り、われわれが自由に行動しているときは誰もわれわれを拘束していない。また、判断力を奪うようなものを飲んだときでもない限り、われわれは熟考するときには必ず自由な精神を有している」[23]。人間でも日常的には自らの「叡智」と「自発性」によって自由に選択し行為しているのだから、世界創造にさいしての神はなおさらだろう。

可能世界が複数あること、すなわち世界の複数性が保証するのは 3 つめの要件「偶然性」である。仮にすべての可能的な事物でできた 1 通りの可能世界だけがあるのなら、論理的にいって神はその世界を創造することしかできず、創造は必然的な行為となってしまう。一方複数の可能世界があるのなら、神は最善の世界でなく別の世界を創造しえたのであり、創造は自由意志を行使した偶然的な行為である。別様の世界がありうるなら論理的な必然性が排除され、そうした世界が神の知性の中に存在するなら形而上学的な必然性が排除される。

ところが神は全知とされ、かつ善意を備えるとされる。そのため当然、神は結局最善の世界を選ぶしかないのではないかという批判がありうる。全知であれば無数の可能世界のうちどれが最善の世界かが確実に分かるし、善意があるなら確実にそれを選ぶだろう。この難点をライプニッツは、決定性と必然性を区別することで対処した。この区別は、行為には常に一定の諸理由が伴うという前提に基づいている。次の引用のような自由意志の擁護をライプニッツはする。

> 意志が何かを選択するにあたってはそうするだけの優れた理由（raison prévalente）が常にある。それが自由であることを保持するためには、この理由が、傾かせるが強いない（incline, sans nécessiter）ものであれば十分である。［……］意志が行動へと移行するのは、善の表象によってのみである。この善の表象はそれに反する表象よりも勝っている。神や善天使や極めて幸福なる魂について人々は一致してこの見解を認めている。しかもそれらが依然として自由であることも人々は認めている。神は最善を選ばないわけにはいかない（ne manqué pas de choisir）が、そうすることを強制されているのではない。神の選択の対象にはいささかも

[22] 『弁神論』288 節。（GP, VI, p.288.）
[23] 『弁神論』34 節。

> 必然性は含まれていない。というのも、別の一連の事象も［現実の事象と］同じく可能だからである。このためにこそ、選択は自由で、必然性から独立したものとなるのである。なぜなら、選択は幾つかの可能的なものの間でなされるのであり、しかも意志は、対象が有する善さによってのみ決定される（déterminée）からである。したがって、神や聖人たちにとって欠陥はないのである。[24]

規定された理由があることは、自由を排除しない。それどころか、知恵にもとづく決断を意味する。それは人間でも同じである。人間は合理的な判断だけでなく気まぐれや感情によって行為することもあるが[25]、この場合でも何らかの理由を伴ってはいる。善さを求めての選択であることに変わりはない。より高い知恵をもてばもつほど、より決定的な理由がみつかる。ゆえに全知である神は、完全に規定された理由にしたがって行為する。

「別の一連の事象も同じく可能」でありさえすれば、論理的・形而上学的必然性は免れる。よって神による創造の場合、最善の可能世界とは別の世界が可能であるなら、偶然的な行為である。こうした自由意志の定義が自己矛盾のない整合的なものかどうかには、疑問や批判がありうるかもしれない[26]。本節で示したのはあくまで、世界の複数性を通して共可能性の概念がライプニッツにおける神の自由を支えることである。人間の自由だけでなく神の自由が重要なことからも、ライプニッツを現代の自由意志論へ応用するのは容易ではない。

２　共可能性についての諸解釈

共可能性にはすでに多くの解釈が与えられている。本節はメッシーナとラザフォードに依拠し、主な 3 種類を概観する。次節以降でドゥルーズを援用するさいにこれらと比較して、ドゥルーズのライプニッツ論が現代のライプニッツ解釈とかけ離れたものではないと示すためである。

メッシーナとラザフォードは共著論文「ライプニッツの共可能性」で、従来の解釈を「論理的解釈（logical interpretation）」と「法則的解釈（lawful interpretation）」に大別する。前者の立場にはメイツ、レッシャー、ヒンティカ、ダグノスティノが挙げられ、後者の立場にはハッキング、カーバー、オリリー－ホーソンが挙げられる。これらの概要が示されたあとで、彼ら自身の「宇宙論的解釈（cosmological interpretation）」が提示される。[27]

「論理的解釈」において 2 つの実体が共可能的であるのは、それらの共同の現実存在を想定して論理的に矛盾しないときそのときだけである。各解釈の特徴は共可能性が成立しない事態、すなわち「不共可能性（incompossibility）」をどう取るかにも表れる。論理的解釈の場合、不共可能性が含意するのは神の力能への制約である。諸実体が共可能的でないなら、それらを同一の継

24　『弁神論』45 節。（GP, VI, pp.127-128.）

25　Ibid.

26　自由意志と決定論の両立は現代哲学のトピックでもある（ex. Michael McKenna and D. Justin Coates, “Compatibilism,” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*（plato.stanford.edu）, substantive revision Feb 25, 2015）。だが、ライプニッツの思想を現代的な意味での両立論の 1 バージョンと安易にみなすことはできない。

27　以下本節は Messina and Rutherford の内容をまとめたものである。

起に属するものとして創造することは神にさえできない。全能の神であっても、論理的矛盾を含むことは行いえない。

「法則的解釈」では、2 つの実体が共可能的であるのは、それらがある普遍的な法則の集合に適合して関係するときそのときだけである。ここでいう「法則（law）」とは主として自然法則のことである。ライプニッツにおける自然法則はひとつの世界内では普遍的であるが、しかし別様でありえないような必然性を備えるわけではない。法則的解釈の場合に不共可能性が含意するのは、諸実体を世界へと組織化することを神が望まなかったということである。そのような世界は神が望む法則を例化しない。神の力能へ制限を加えるわけではない点にも、論理的解釈との違いがある。

以上 2 つの解釈に対してメッシーナとラザフォードは、「宇宙論的解釈」を提示する。この解釈では 2 つの実体が共可能的であるのは、神がそれらを同一の世界に属するものとして思い描ける（conceive）という事実による。この解釈では、諸実体が不共可能的なのはそれらが同一の世界に属するところを神に思い描けないときとなる。同一の世界に属するものとして思い描けるかどうかは、論理的矛盾を含むかどうかではなく、同一の時間と空間に関係づけられるかどうかで決まる。クラーク宛書簡で述べられるようにライプニッツにおける時間とは可能的な「継起の秩序（un ordre des succession）」であり、空間とは可能的な「共存の秩序（un ordre des coexistences）」である[28]。可能的な秩序であるため、現実に世界を創造する前の段階であっても神はこれらを思い描くことができえる。

３　不共可能性

３．１　ドゥルーズによる不共可能性の検討

本節はドゥルーズのライプニッツ論『襞―ライプニッツとバロック』（1988 年）における不共可能性の分析を整理する。ドゥルーズへの参照は共可能性を解釈するうえで重要だと示すのが、本稿の目的であった。「不共可能性」とは共可能性が成立しない状況である。ある世界が創造されれば別の世界が創造されることはない、すなわち世界どうしは共に存在することができないのだから、不共可能性は諸世界間の関係である。これに対し、共可能性は諸事物間の関係だった。

不共可能性をドゥルーズはこう評価する。

> 神が無数の可能世界のあいだから選択するということは、かなり流布した考え方で、とりわけマルブランシュに見られる。しかしライプニッツに特有なのは、可能世界のあいだに非常に独創的な関係を提案したことである。この新しい関係を、ライプニッツは不共可能性（*incompossibilité*）と名付け、これは神の知性の中にひめられた偉大な神秘だと述べている。[29]

不共可能性は、別世界の主語同士の間にある「局所的な矛盾（contradiction locale）」ではない。

---

[28]　クラーク宛書簡 3 通目 4 節（1716 年）。（GP, VII, p.363.）

[29]　Deleuze, p.79. 日本語訳は宇野訳から引用。

こちらはたとえば、罪人であるアダムと罪人でないアダムとのあいだの関係である。両者は互いに対立し、同時に存在することがない。さらに、アダムが罪を犯さないような世界に罪人であるアダムが存在することはできないし、アダムが罪を犯すような世界に罪人でないアダムが存在することもできない。ドゥルーズによれば諸世界間の不共可能性とは、このような矛盾の関係とは異なるものである。2 つの世界が同時に両立して存在することはないが、しかし現実世界の代わりに別の世界が交替して存在することはあり得た。アダムが罪を犯す世界が現実であるということは、アダムが罪を犯さない世界が決して現実ではあり得なかったということを含意しない。現実世界が唯一のものとして存在する理由は、2 つ以上の世界が並存はできないという世界間の不共可能性のためである。

上記のドゥルーズによるライプニッツ論は、前節で概観した共可能性についての 3 種類の解釈と比較してかけ離れたものではない。なぜなら前者も後者 3 つと同じく共可能性を、事物のたんなる存在可能性とは別のものとしてとらえているからである。罪人でないアダムが存在しなかったのはその存在が不可能であるからではなく、その存在が現実の世界と共可能的でないからである。現実化はされないが可能ではある世界が存在することは、神の自由意志を支えるためライプニッツ哲学において重要なことだった。ドゥルーズのライプニッツ論は、この文脈から離れていない。

メッシーナとラザフォードがいうように、共可能性の解釈の特徴は共可能性が生じない事態、すなわち不共可能性をどうとらえるかに表れる。前節でみた 3 種類の解釈のうち、論理的解釈では論理法則が、法則的解釈では自然法則が、宇宙論的解釈では時間・空間がそれぞれ重視されるのだった。それでは不共可能性自体を重視するドゥルーズのライプニッツ論には、どのような特徴が認められるだろうか。

ライプニッツ解釈にドゥルーズ『襞』を援用する先行研究として、ここで橋本の論文を参照する。この論文はドゥルーズに加えてフレモンも援用し、不共可能性が神の自由とこの世界の最善性を根拠づけるプロセスを確認する[30]。

> それ［不共可能性］は共可能の過剰な増殖を防ぐために設けられている。不共可能性はひとつのフィルターである。このフィルターは不可能なものではなく、可能であるのにこの世界には容れられないことをふるい落とす。可能だがこの世界で生じないものたちは、ただ可能の群れとしてふるい落とされるのではなく、そのどれもが一定の可能的世界へとわりふられる。そしてそれら無数の可能的世界同士もまた互いに不共可能となる。[31]

不共可能性は、可能的なものであるのに現実世界には含まれないものを現実から排除するフィルターとして機能する。さらに、それらがただ排除されるだけでなく一定の可能世界へわりふられて諸可能世界を為すことから、唯一の世界しか神には選べなかったなどということもない。

---

[30] 橋本、passim。ただし神の自由はあっても人間の自由はないという解釈については、本稿は全面的に同意するものではない。

[31] 橋本、135 頁。次を参照先として挙げている。Deleuze, p.120.

> たとえ不共可能性によって、この世界では、ルビコンを渡ったシーザーとルクレティアを凌辱しないセクストゥスを共存させることはできなくても、そうしたふたりが共存する世界も可能である。世界選択するにさいして、神に選択肢は無数にある。そのなかから、最善だと判断した世界を現実化したのだから、神には自由があった。[32]

不共可能性によって一定の可能的なものは最善世界とは別の世界を構成することになり、そうした世界が複数あることが神の自由を保障する。

神の自由意志への世界の複数性の寄与は、本稿がそうしたように『襞』を参照しなくても示しうる。よって注目すべきなのはむしろ、橋本が指摘する「フィルター（filtre）」[33]の機能である。ドゥルーズのライプニッツ論の特徴はここにある。フィルターとしての不共可能性を重視することで、ある可能的なものは別様の可能的なものを排除するというライプニッツ哲学の前提が明らかになる。

３．２　ライプニッツにおける神

『襞』の記述にはライプニッツ哲学から離れる箇所もある。明白な例は神についてで、ドゥルーズはライプニッツにおける神とは違う神を仮定する。

> ボルヘスがなぜライプニッツよりも、むしろ中国の哲学者を引き合いに出すのか理解できる。彼はモーリス・ルブランによく似ていて、神が一つの最良の世界を選ぶかわりに、同時にあらゆる不共可能的な世界を実在に至らせることを願うのだ。［……］しかしとりわけ神が、あらゆる可能なもの、不共可能的でさえあるものを存在させることを妨げるのは、そのような神はモーリス・ルブランの乞食のように嘘つきの神、ペテン師の神、ごまかし屋の神であろうからだ。ライプニッツは、欺かない神についてのデカルトの推論をかなり警戒し、これに不共可能性の水準で新しい根拠を与えている。神は戯れるが、戯れの規則を与えるのだ（ボルヘスやルブランの規則なしの戯れとは反対に）。この規則とは、可能世界は神が選んだ世界と不共可能的ならば、存在にたどりつくことがないということだ。ライプニッツによれば、『アストレー』のような小説だけが、われわれにこのような不共可能的なものの理念を与えるのである。[34]

この引用部では、ライプニッツの神は相対的に扱われている。しかしライプニッツ哲学では、形而上学は自然神学から切り離せるものではない。すでに述べたように、ライプニッツが可能世界を扱う目的は現実世界の最善性を論証することにある[35]。この「善」は、キリスト教の価値観と

32　橋本、136-137 頁。

33　この語はドゥルーズ本人が使用している（Deleuze, p.120）。

34　Deleuze, p.84. 引用部より前の部分では『弁神論』最終部の寓話に触れた後さらに、ボルヘスの「中国の哲学者」が登場する小説とルブランの小説が可能世界論を描く話として言及されている。

35　松田、101 頁。

結びついている。さらにサヴェッジによれば、ライプニッツの可能世界論は彼の宗教上の立ち位置を反映したものである[36]。福音主義（Evangelicalism）では、誰が救われるべきかを神が定めるとき、その決定は反事実的な知識（counterfactual knowledge）を含むものである[37]。つまり、神の選択に十分な理由を与えるためにこそ、決して創造されない可能世界がライプニッツには必要だった。そのように現実化されない可能世界の存在がなければ、反事実的知識は根拠を欠くことになり、神の決定は理由なしに行われることになってしまう。

ドゥルーズが仮定する「神が一つの最良の世界を選ぶかわりに、同時にあらゆる不共可能的な世界を実在に至らせることを願う」ような事態がライプニッツ解釈では認められないことは、かえって共可能性の理解に役立つ。それは、「可能的なもののすべてが宇宙の同一の継起の中で互いに共存できるとは限らない」[38]のがライプニッツ哲学において結論よりは前提に近いことを明らかにする。ライプニッツでは、神の知性は神の意志から独立なのだった。そのため、「可能的なもののすべてが宇宙の同一の継起の中で互いに共存できるとは限らない」のも、神が望んだからそうあるのではなく、ことがらそれ自体として神の知性に由来するように思える。しかしドゥルーズがライプニッツの神とは別の神を仮定するとき、あらゆる可能的なものの現実存在を妨げるか妨げないかは、神の意志に帰されている。ボルヘスやルブランの小説で表される神と違い、ライプニッツの神は「戯れるが、戯れの規則を与える」。

共可能性という概念の射程は、規則を与えるという神のありように条件づけられる。つまり共可能性という概念よりも、規則を与える神を信じる自然神学の立場が論理上先行する。ライプニッツにおける共可能性は、神にかかわるこの前提から切り離しては十全には理解しえない。

結論

本稿の内容は以下の通りまとめられる。

1.1 共可能性とは複数の事物がともに存在しうる可能性を指し、共可能的であることはたんに可能的であることから明確に区別される。ある事物が可能的であることは、現実世界を構成する事物とそれとが共可能的であることを保証しない。

1.2 ライプニッツが批判したスピノザの必然主義を回避するために、共可能性は重要な概念である。

1.3 ライプニッツにおける自由を構成する「熟考」「自発性」「偶然性」のうち、共可能性は 3 つめの「偶然性」を保証する。それは共可能性が世界の複数性を可能にすることによってである。神が自由意志によって世界を選択したために、現実の世界の存在は偶然的である。

2 共可能性についての解釈は、論理的解釈・法則的解釈・宇宙論的解釈の 3 つに大別できる。

3.1 ドゥルーズがそのライプニッツ論『襞』でおこなった不共可能性についての分析は、「フィルター」の機能に重視することに特徴がある。不共可能性は、可能的ではあるが現実の世界と共可

---

36 Savage, “Introduction.”

37 Savage, p.4.

38 GP, VI, p.236.

能的でないものを排除する

3.2 ドゥルーズがライプニッツ解釈から離れた過程をする箇所からかえって、可能的なもののすべてが現実存在することはできないというライプニッツの前提の揺るがしがたさが明らかになる。

「規則を与える」神を信じる立場が共可能性を理解するうえで重要なことは、ドゥルーズを援用することで明らかにできた。これによって本稿は、ドゥルーズのライプニッツ論を参照する有用さを示した。

（あべともこ　哲学哲学史・博士後期課程）

文献一覧

ライプニッツ、『ライプニッツ著作集』、工作舎、1988-1999、2015-2018 年。

Deuleuze, Gilles, *Le pli : Leibniz et le baroque*, Éditions de Minuit, 1988.（ドゥルーズ、『襞―ライプニッツとバロック』、宇野邦一訳、河出書房新社、1998 年。）

Leibniz, G. W., *Die philosophischen Schriften*, hrsg. v. C. I. Gerhardt, Weidmannsche Buchhandlung, 1875-1890.［略記：GP］

Leibniz, G. W., *Sämtliche Schriften und Briefe*, hrsg. v. der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin, 1970-.［略記：A］

Spinoza, Baruch de, *Éthique*, texte original et traduction nouvelle par Bernard Pautrat, 1988, Seuil.（スピノザ、『エチカ』上下、畠中尚志訳、岩波文庫、1975 年。）

橋本由美子、「ピラミッドの頂点――ドゥルーズに照らしたライプニッツの世界と最善についての一考察――」、『理想』、No.691、理想社、2013 年。

松田毅、「ライプニッツはスピノザと出会う前からライプニッツだったのか」、『ライプニッツ研究』、第 2 号、日本ライプニッツ協会、2012 年。

Bouveresse, Renée, *Leibniz (Que sais-je?)* PUF, 1994.（ルネ・ブーヴレス、『ライプニッツ』、橋本由美子訳、白水社文庫クセジュ、1996 年。）

de Buzon, F., « COMPATIBLE » et « COMPOSSIBLE », *Encyclopédie philosophique universelle, Les notions philosophiques: dictionnaire*, v.1, publié sous la direction d'André Jacob, PUF, 1990.

Futch, Michael, *Leibniz's Metaphysics of Time and Space*, Springer, 2008.

Messina, James, "The Fate of the World (and Compossibility) After Leibniz: The Development of Cosmology in German Philosophy from Leibniz to Kant," *Leibniz on Compossibility and Possible Worlds*, ed. by Gregory Brown and Yual Chiek, Springer, 2016.

Messina, James and Rutherford, Donald, "Leibniz on Compossibility," *Philosophy Compass*, 4/6, 2009.

Rutherford, Donald, "Chapter 4: The Actual World," *The Oxford Handbook of Leibniz*, ed. by Maria Rosa Antognazza, published online 2013.

Savage, Reginald Osburn, *Real Alternatives, Leibniz's Metaphysics of Choice (Philosophical Studies Series 74)*, Kluwer Academic Publishers, 1998.

Compossibility and Incompossibility by Leibniz

Tomoko Abe

Gottfried Wilhelm Leibniz (1646-1716) believed that God created our world best and that an infinite number of other possible worlds were in God's intellect.

1.1. To avoid necessitarianism, he based his theory on an original concept called "compossibility," which refers to the possibility of a plurality of objects existing together.

1.2. Compossibility helps in grounding contingencies. It has metaphysical significance because denying necessitarianism is one of the important features of Leibniz's metaphysics.

1.3. Freedom according to Leibniz is made of three constituents: intelligence, spontaneity, and contingency. Multiple choices, which are enabled by compossibility, guarantee the last constituent, contingency. When God creates a world with free will, the existence of the world becomes contingent.

2. According to Messina and Rutherford, interpretations of compossibility are of three kinds, namely: logical interpretation, lawful interpretation, and their own cosmological interpretation.

3. The concept of compossibility presupposes incompossibility (the impossibility of plural objects existing together). Gilles Deleuze (1925-1995) studies the incompossibility between worlds and analyzes Leibniz's philosophy. His *Le pli* is a useful supplement to interpreting compossibility.

「キーワード」

ライプニッツ、共可能性、不共可能性、最善世界創造説、神の自由意志